

**【活動概要】**

ネパール・ラリトプル郡にあるカレシュワリ中等学校において、8/21 から 9/3 にかけて通学路改善プロジェクトを行った。現地協力者である JOCV 隊員と学校教員と共に活動を行った。予定していた主な活動内容は①児童の安全を目的とした学校施設の改善②日本語学習教材・日本留学試料の提供③後輩の指導である。

**【活動結果】**

1. 通学路の改善

以下の図 1、2 に示されるように学校前の通学路を改善した。作業箇所は図 3 に示す。作業として①学校前にある排水溝（図 1 参照）を大きめの石（長さ約 70cm）で蓋をし、周りを砂利で埋めることにより平らな道とした②できた道と道路との間を小さめの石（長さ約 50cm）で分けることにより通学路を確保した。



図 1 活動前の様子(左は A 側、右は B 側)

図 2 活動後の様子(左・真ん中は A 側、右は B 側)

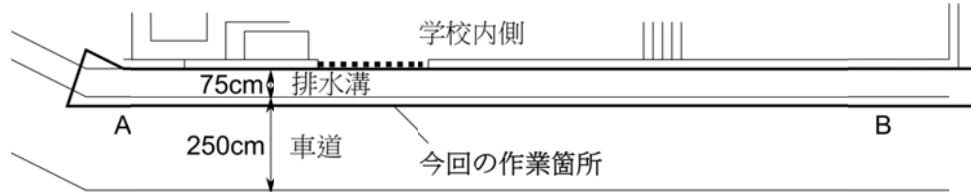


図 3 作業箇所

2. 日本語学習教材・日本留学試料の提供

4、5、6 歳向けの日本語教材を日本語の学習を希望する学生に配布した。学校施設修繕の作業が予定よりも時間を要するものとなったため、日本語の指導を十分に行うことはできなかった。教材を渡す際など、機会を見つけて言葉の読み方と言葉の意味を教えた。



図 4 使用した日本語教材

3. 後輩の指導

後輩へは作業を通して機会があるごとに話をした。主に以下の事柄について話をした。①基本的な工学技術の重要性②現地住民との関わり方③活動をする・しないの判断④基礎学理の重要性⑤自分の経験を生かすこと⑥根拠を持った意思決定をすること。多くの事柄について話をしたため、すべてが記載されていない。

**【通学路作成の実施詳細】**

渡航前に、カレシュワリ中等学校の校長と JOCV 隊員とメールで連絡を取り、植物を植えることによる学校前の通学路の修繕を計画していた。現地到着後、他の教員との意思疎通を図るためにミーティングの場を開いた。他の教員は活動について十分に内容を把握していなかったため、活動目的や考えを共有する場であった。児童の安全の確保と防犯という目的を念頭に現地住民の意見を取り入れ、植物ではなく石によって通学路を確保する計画に修正した。計画作成時には以下の点を考慮したのは以下の 6 点である。①児童の安全確保と防犯という目的を重視する②新たな事故・問題の要因となる物を作らない③期限内に完成するものを作る④将来的にメンテナンスが可能な工法を取る⑤可能な工事の内、最も経済的な工事とする⑥現地住民の積極的な同意が得られる内容とする⑦作業員の安全を確保できるものとする。

石は道路の学校の反対側にある川から調達した。鑿とハンマーによって石を砕き、道路脇に運んでから加工することで利用した。図 5 に石の調達から加工までの様子を示している。活動には現地住民の 4 名を雇った。時間は 9 : 00 から 17 : 00 まで、給与は一人一日当たり 500Rs(約 500 円、現地住民の平均的な一日当たりの収入)とし、費用は学校が負担した。作業期間は作業可能日と滞在日数から 8 日間とした。



図 5 石割、石が割れたところ、石運び、石加工

### 【活動の特徴】

#### ① 学校の積極的な支出

当初の予定では 8 日間で作業が完了する予定であった。しかし今年は雨季が長引き、作業時度々（一日 1~2 時間程度）雨が降り作業を中断せざるをえなかった。その結果、2 日作業日数が足りなくなった。作業を完了するためには、追加で費用を支出する必要がある。この活動への予算は元来学校の予算へは計上されていないため、当初は費用が出せないといっていたが、活動への現地住民の評価が高く、作業が進むにつれて学校関係者も積極性を増し、最終的に追加の費用を支出した。このことより、計画作成時には考慮した 6 点を考えることによって、現地の人の積極性を変えるような活動ができることを学んだ。

#### ② 作業員の勤労態度の改善

一般的にネパール人には勤勉さに欠ける面がある。雇った作業員も例にもれず、初日は 30 分遅れで作業場に到着した。一方で、私と黒部そして JOCV 隊員は 9 時前から準備を始め、作業を開始していた。そして作業員が到着した後も協力して作業を行った。その後、我々の作業の様子に感化されたのか、日ごとに到着時刻が早くなっていき 4 日目には全員が 9 時に到着していた。このことより、管理者の立場にたったときの作業員とのコミュニケーションやモチベーションの向上を図る具体的な方法を学んだ。

#### ③ 現地住民の協力

日ごとに異なる人の協力が得られた。また学校の生徒たちの協力も得られた。図 6 に協力してくれた様子を示す。このような協力的な姿勢の要因の一つは、作業以外において現地住民とコミュニケーションをとり、児童と遊んでいたことがあると考えられる。



図 6 作業を行う現地住民と子供たち

#### ④ 機材や高価な材料を用いない土木作業

作業は現地で調達可能なものを利用して行われた。石は川から調達し、土砂はがけ崩れの現場より調達した。これらによって、十分な強度を持つ歩道が完成した。また道が破損した場合も、川から石を調達することによって修繕が可能であり、現地住民は修繕を行う技術を持っている。このような現状を見ることによって、単に先進国で使われている工法を導入するのではなく、現地の人が扱える技術、材料の調達可能性、メンテナンス時間、費用などを総合的に考えて計画を立てることの重要性を実感し、また具体的に考える経験をした。

### 【付属作業】

学校施設修繕活動を通して、以下のことが付随的に行われた。

#### ① ゴミの清掃

現地では元来ゴミは捨てても自然に還るといった考えがあった。そのため土木作業時に多くのプラスチック製品を目にした。そこで子供達と土を掘る際に掃除を行い、プラスチック製品が自然に還りにくいことを説明した。

#### ② 土砂掃除

学校近くの道路が土砂崩れによって、土に覆われている状況であった。重機が無いとその土砂は放置状態であった。その結果、水はけが悪化し、道路が滑りやすい状態になっていた。通学路の作成において土砂が必要になったため、この土砂崩れ現場の土砂を利用することにした。その結果、水はけの改善を行い、土砂の一部を取り除くことができた。